

八王子千人同心日光往還ウォーク

第22回 茂林寺前駅から館林駅（計画）

集合 東武伊勢崎線茂林寺前駅 9時。

歩行距離 約11.6km。

第22回 茂林寺前駅から館林駅

実施日 2023（令和5）年4月12日（水） 天候 晴れのち曇り 気温 高い

参加者 折本 文雄、前北 勝司、中田 信義、中島 征雄 計4名

コース 東武伊勢崎線茂林寺前駅（9：21）～茂林寺入口交差点（9：39）～杉並木起点跡（9：44）～東武伊勢崎線踏切（10：01）～遍照寺（10：10～14）～新宿一丁目交差点（鍵の手）（10：18）～江戸口御門跡・館林駅入口交差点（10：24）～初引稲荷神社（10：26～31）～青龍神社・青龍の井戸（10：33）～旧館林二業見番組合事務所（10：36）～外池商店（10：39）～「His Master's Voice」の写真が掲げているバー（10：43）～鷹匠町長屋門（10：45）～鷹匠町武家屋敷・武鷹館（休館）（10：48）～足尾鉍毒事件田中正造記念館（休館）（10：52）～土橋門（10：58）～三の丸～千貫門（11：03）～二の丸～本丸跡・本丸土塁（11：10～17）～南郭～八幡宮（八幡郭）～菖蒲畑・休憩（11：21～29）～旧秋元別邸（11：31～35）～尾曳稲荷神社・尾曳郭・弁財天（11：38～45）～（下戸張口門跡…寄らず）～加法師口門（城内口）跡（11：53）～惣郭土塁跡～加法師口門（城下口）跡（12：04）～夜明稲荷（12：08～11）～手打ちラーメン自慢亭・昼食（12：12～13：03）～大手門跡（13：10）～館林宿本陣跡（13：16）～青梅天満宮（13：21～28）～出世稲荷神社（13：29）～大道寺（13：31～35）～善導寺跡「竜の井」（13：40）～館林駅（13：45）

写真は2020（令和2）年10月29日と11月10日と2022（令和4）年12月28日と今回のもものを使用。

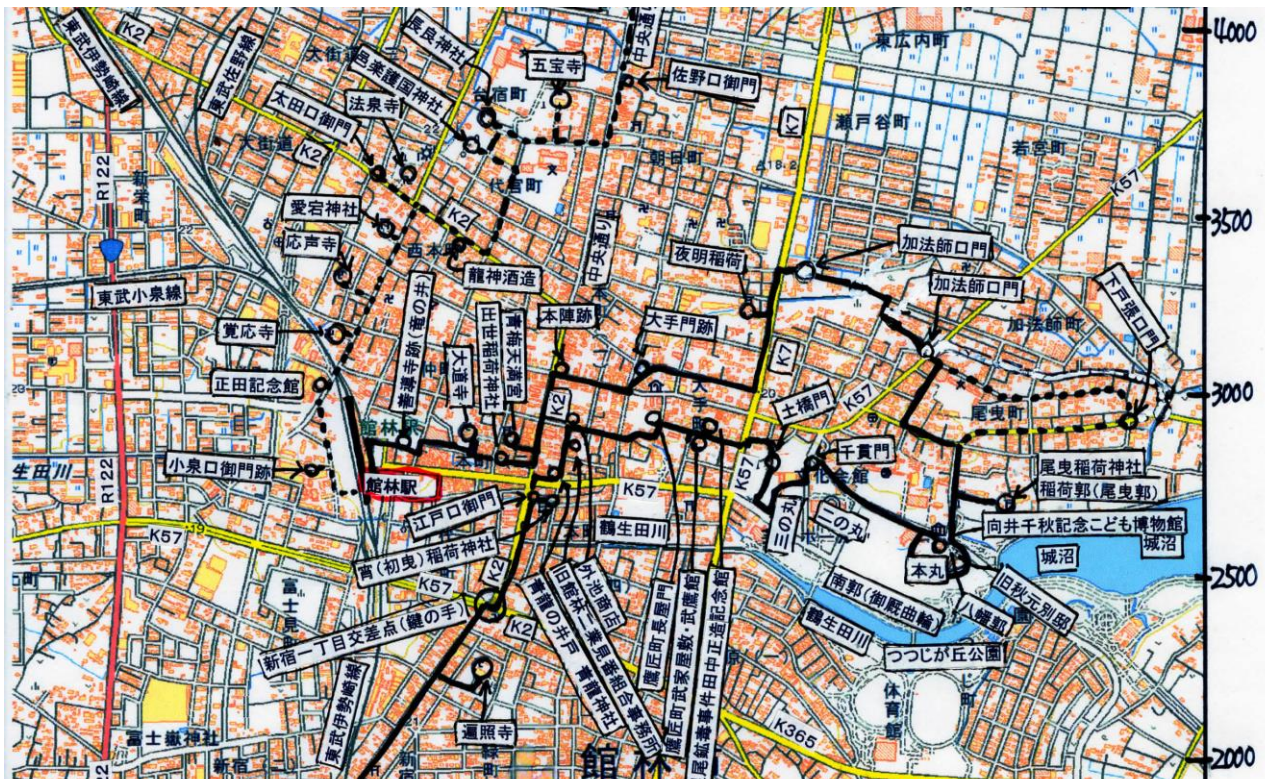
図やイラストは「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より。

G P S 歩行距離：10.6km。 累計歩行距離 205.7km。

全体所要時間：4時間24分。 移動時間：3時間02分。 停止時間：1時間22分。

移動平均速度：3.50km/h。 全体平均速度：2.41km/h。





館林城図(徳川氏城主時代)



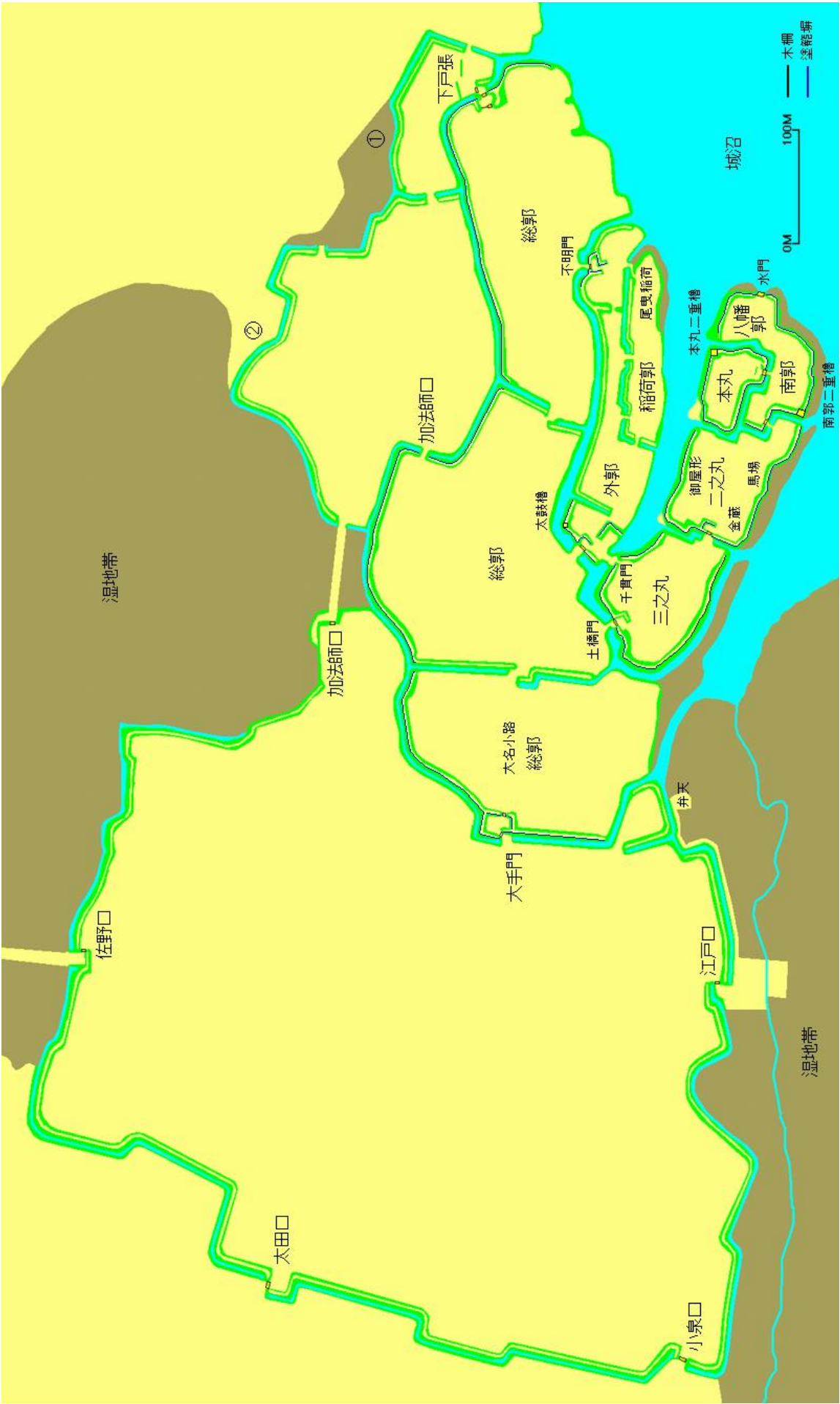
〈徳川綱吉の城〉

のちに江戸幕府5代将軍となる徳川綱吉は、将軍就任前に館林城主を務め、城の大規模な改修を行いました。具体的な改修の記録は見つかっていませんが、綱吉時代の城絵図とそれ以前のもの^{とくがわつなよし}を比べると、本丸の三重櫓や本丸周辺の石垣などが描き加えられており、これらが綱吉によって新たに築かれたものと推測^{いしごかし}されます。三重櫓の規模(平面積)は「七間・八間※」^{せんしゅうやくち}とあり、館林城の他の絵図では見ることができません。綱吉時代の館林城が、天守閣に相当する三重櫓を持った将軍家一門にふさわしい城であったことがうかがえます。 ※一間=約1.8m



八王子千人同心日光往還ウオーク
 第22回 新宿一丁目交差点(鍵の手)から館林駅

新宿一丁目交差点(鍵の手)



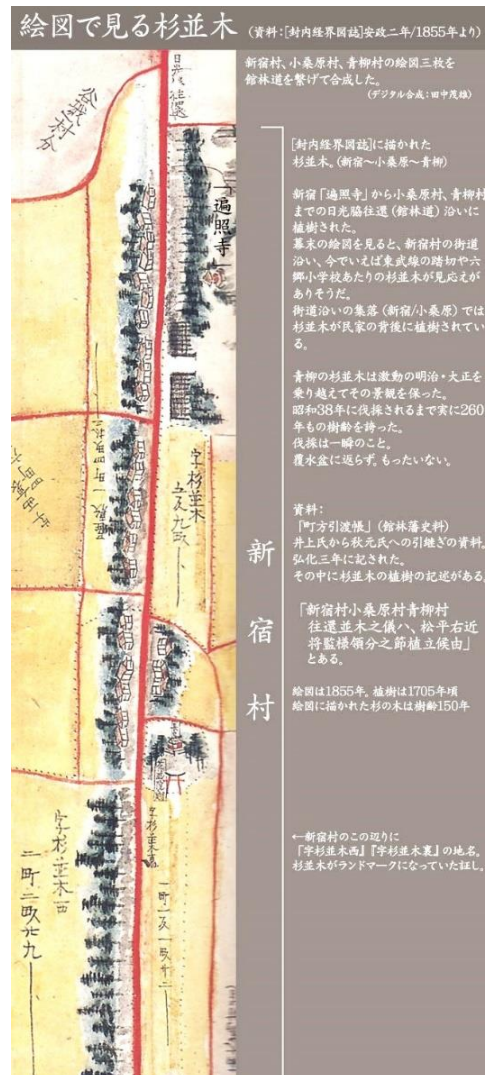
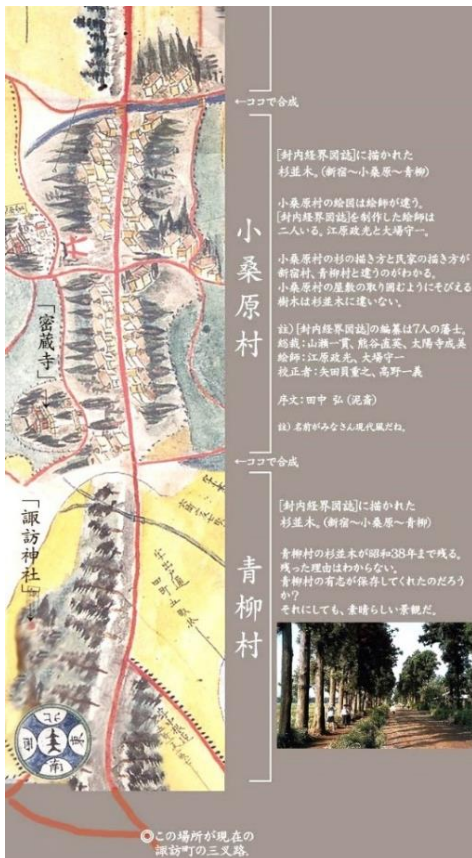
茂林寺前駅を9時21分に出発。今日は、寒冷前線が通過し午後小雨。その後黄砂がすごいとの予報が出ているが出発時点では少し暑いが良い天気。終わるまでなんとか降らないことを祈る。

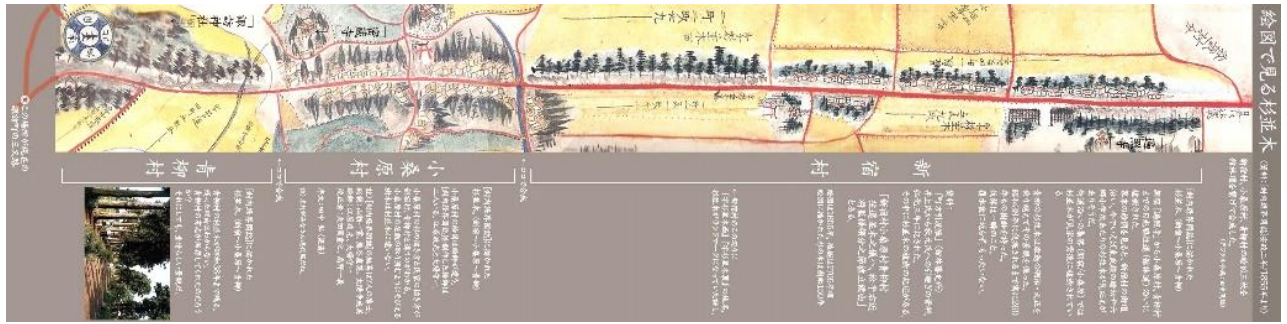


踏切を渡り、750m程の茂林寺入口交差点で街道（県道7号線）に出（9：39）、右折。約300mの諏訪町交差点の三叉路の間の小区画に林がある。（9：44）



ここがここからこの先の遍照寺近くまで1500m程続いた杉並木の起点跡である。杉並木は、宝永年間に植樹され、昭和38年に道路拡張のため伐採された。





諏訪町交差点から約1100mで東武伊勢崎線の踏切を渡る。踏切から430mの右の道を入った奥に「遍照寺（へんじょうじ）」がある。



遍照寺

真言宗豊山派の寺院。高鑰山釈迦院遍照寺と号す。本尊は、不動明王。当寺は、新田氏の先祖・新田義重により、建久九年（1198）に明和村に創建され、天正十八年（1590）に現在地へ移転したと伝わる。館林藩主榎原康政（徳川四天王の一人）が祈願所としたゆかりの寺。

当寺は、館林城の入城を整える寺。江戸から館林へ来た殿様一行は入城する手前の遍照寺に寄り、身支度を整えてから江戸口御門へ向かった。

遍照寺から県道7号線に出て右折し、230m程の新宿一丁目交差点で県道と交差するが、この交差点は鍵の手のような曲がり方をしている。(10:18)



鍵の手



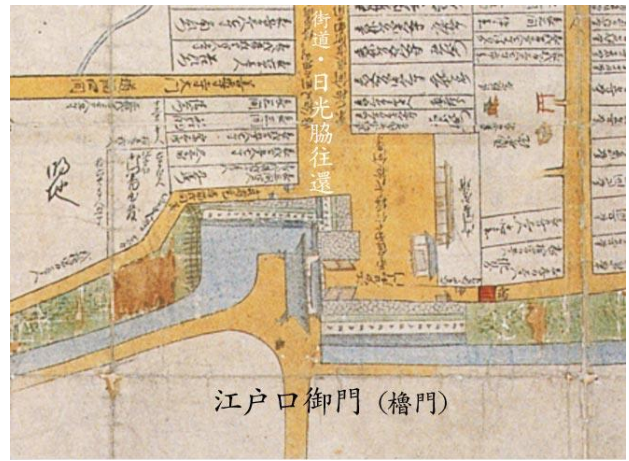
鶴生田川（つるうだがわ）を渡り、緩やかな上り坂となる。

館林駅入口交差点の右側一本手前の道の角・ケツカ書店辺りが「江戸口御門」で柵形門で、西を向いていた。(10:24)

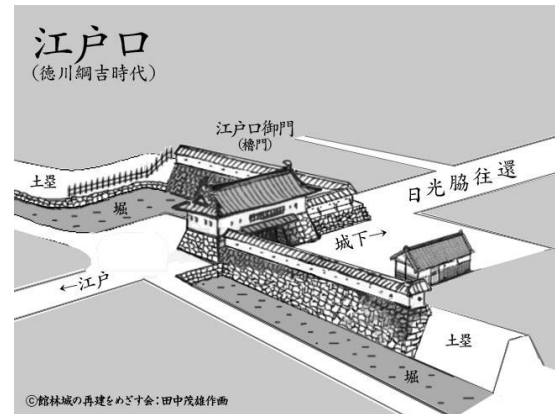
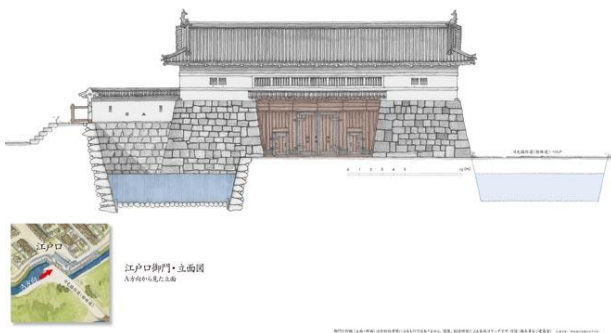


江戸口御門

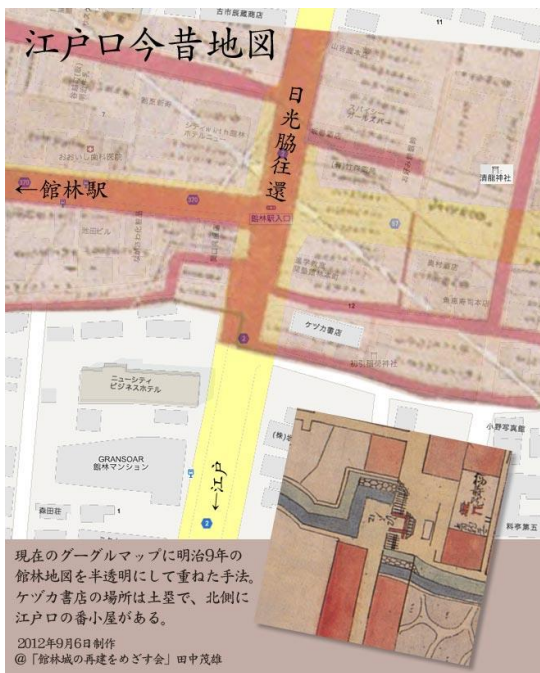
城下を南北に縦断する主要街道「日光脇往還」の南の出入り口。網吉時代の絵図によれば壮麗な櫓門であり、柵形の形態で堀と石垣を備えた堅固な門であることがわかる。館林城下で一番壮麗な門。門の正面に警護のための番所がある。警備する門番を木戸守といい、昼は5人体制、夜間のみ交代で警備した。



〔網吉時代館林城の研究〕
江戸口御門



東



現在のグーグルマップに明治9年の館林地図を半透明にして重ねた手法。ケヅカ書店の場所は土塁で、北側に江戸口の番小屋がある。
2012年9月6日制作
©「館林城の再建をめざす会」田中茂雄



江戸口御門を抜け、真直ぐ北へ行く道は佐野口門を通る日光脇往還。左(現在の館林駅へ向かう)道は、今は無き善導寺の大門への道。

ケヅカ書店の裏に「宵(初曳)稲荷神社」がある。(10:26~31)

宵稲荷神社の南の石垣は江戸口御門南側の堀の石垣。



宵稻荷神社（境内案内板より）

名称 宵稻荷神社（よいいなりじんじゃ）

別称 初曳（はつひき）稲荷、待辺（しべ）の稲荷

祭神 倉稻魂命（うかのみたまのみこと）
大海津見命（おおわだつみのみこと）
大物主命（おおものぬしのみこと）

鎮座 千五百三十二年頃（天文元年）

ご由来

当社縁起によると、宵稻荷と称するは当町「夜明け稻荷」に対するもので、1532年頃、赤井山城守により勧請、榊原式部大輔再建されたと伝えられる。（中略）稲荷神社の神使をキツネとする民間信仰とキツネの恩返しによる館林城建築という宵稻荷伝説が、当地に古くより（後略）



宵稻荷伝説

大袋城主赤井照光は、ある年の正月、親類の舞木城主俵秀賢（ひでたか）の所へ年始参りに行く途中、近藤林まで来たとき、大勢の子供が一匹の子キツネを捕まえているのを見て哀れに思い、家来の鉢形惣次郎に言いつけ子供らに金を与え、子キツネを林の中に放してやった。

その日の夕刻のこと、照光主従が再び近藤林まで来たとき、行く手に衣冠に身を正した気品高い老人がいた。照光が声をかけると、その老人はうやうやしく頭を下げ「私は大袋山に住む稲荷新左衛門と申す老キツネでございます。今朝あなたに命を助けられたのは私の子供で、その恩返しをしたいと、先刻よりお待ち申していたのでございます」と語った後、あなたの住んでいる大袋城は、まことに不吉な城である。これに反して城沼の北岸にある館林の「菊間の長者」の屋敷跡こそ四神相応の地であるから、ぜひ館林へお移りになり、ここに城を築かれれば、天下の名城となりましょう。縄張り私は私が致します、と言いつつ終わると老人は、たちまち白キツネの姿を現して、どこともなく立ち走った。

その年の七夕の夜、照光が城内の広縁にいと、かのキツネが姿を現し「今宵こそ、またとない機

会でございますので館林へご案内しましょう」と照光の前に立って歩き出しました。いぶかしく思ったが、照光は相手の氣勢に押されてあとに続き、現在の宵稻荷神社のあるあたりからフサフサとした尾を地面につき城の地割をはじめたという。やがて老キツネの教えによって館林城が完成すると、照光は尾曳・夜明二稻荷とともに、この地に稲荷祠を建てた。これが宵稻荷であるという。

宵稻荷は、キツネが始めて尾を引き出したということで「初引稲荷」また、この付近の地名をとって「待辺の稲荷」ともいわれる。江戸初期城主榊原康政は社殿を再建、またそれ以後の歴代城主は祭典料として毎年、蔵米七俵を奉納する例であった。

初引稲荷から県道に出、北側に渡ると、直進する道の角に「青龍神社」と「青龍の井戸」がある。

(10 : 33)



青龍の井戸（青龍神社）

この井戸は、江戸時代に福寿院（現在は廃寺）の境内にあり、伝説によると、延宝年間（1673～1681）に突然清水が噴き上がり、中から女官姿の「青龍権現」が姿をあらわしたことから「青龍の井戸」と呼ばれるようになったといわれています。

当時は、徳川綱吉が館林の城主となった頃で、城下は、御三家の一つである水戸家に並ぶほどのこれまでに例を見ない隆盛を誇っていたことから、ますます良い兆しであるとして、人々の大変な噂となりました。

この話を聞いた綱吉の生母「桂昌院」は井戸のかたわらに「青龍権現社」を再建したといわれ、綱吉も五代将軍となると10石の朱印地を寄進したと伝えられており、神社の入口には、現在でも「葵の御紋」が見られます。

また、この井戸と善導寺（現在は楠町に移転）境内の「竜の井」と「城沼」とが一つにつながっていたという伝説もあり、こうしたことから、7月10日の縁日には、延命長寿の靈験あるこの井戸の水を参拝者に与える習わしがありました。

平成10年に、井戸の調査がおこなわれましたが、井戸の深さは7メートル程、井戸の断面は、深さ約3メートルのところできく膨らみ、集水のための工夫が施されていることがわかりました。

現在でも、冷たくてきれいな水がこんこんと湧き出しています。





青龍神社から左（北）に入る道（この道を肴町通りという）を70m程進むと右側に「旧館林二業見番組合事務所」がある。（10：36）この通りに面した町並みは、魚商の居住した地と伝えられ、肴町と呼ばれた。肴は魚を意味する。



旧二業見番組合事務所

二業とは、芸者さんの置屋（芸妓屋業）と料亭（料理店業）の二つのことで、見番はそれらの取り次ぎや料金の精算、取り締まりをしたところです。（三業は二業の他に待合が加わる）

一階は事務所、2階は芸者さんの稽古場であった舞台付き36畳の大広間があります。現在は本町二丁目東区民会館として地域のかたに利用されています。

この二業見番は、木造建築物として全国で数か所しか残っておらず、非常に文化的価値が高い建物です。平成28年に国の登録有形文化財に指定されました。

この建物は、昭和十三年（1938）に建築されました。通りに面する西面は入母屋造屋根の妻と唐破風造の玄関を見せ、二階には左右対称の切妻屋根を並べるなど、和風意匠で華やかに飾っています。



肴町通りを進み、突き当りの左右の道と肴町通り等は、館林市民との協働で整備された歴史的建築物をつなぐ散策路「歴史の小径」である。館林駅から旧鷹匠町（大手町）の全長約1500mに14の施設がある。「青龍の井戸」「旧二業見番組合事務所」も含まれている。

歴史の小径と着町通りの出会った所の直ぐ左に「外池商店」がある。(10 : 39)



外池商店

屋号は和泉屋といい、江戸時代中期、近江国（滋賀県）から移り込み、造り酒屋を営んでいましたが、明治33年には、味噌、醤油の製造業を行っていました。現在の建物は、昭和4年に建てられたもので、毛塚記念館と同様町屋の特徴を備えています。敷地内にある蔵は、百々歳蔵（ももせくら）と名付けられ、以前はコンサートなどの文化活動を行うことができるホールとしても利用されていました。



歴史の小径を東へ行った十字路を横切り、小径は左・右と曲がり、曲がった右側に「バー カタリナ」があり（10 : 43）、入口ドアの横にレコードを聴いている「His Master's Voice」の写真が掲げている。



左に曲がった左に「鷹匠町長屋門」がある。(10:45)



鷹匠町長屋門

旧野辺町（三野谷）の豪農「松沢家」が利用していた長屋門を利用して、武家屋敷長屋門として、平成21年に新築したもの。長屋門は武家の屋敷門の一つで、長屋の間に門があることから長屋門といわれており、門の両側の部屋は使用人の部屋や物置として使われていた。

鷹匠町長屋門から東へ100m弱行った所の右側に「鷹匠町武家屋敷・武鷹館」がある。(10:48)

開館が土・日・祝日のため見学出来ず。



鷹匠町武家屋敷「武鷹館」

江戸時代、この周辺は鷹狩用の鷹を飼育する鷹匠が住んでいたことから鷹匠町と呼ばれており、この鷹匠町にある武士の住宅ということで、一般公募によって「武鷹館（ぶようかん）」と名付けられました。特に館林藩士住宅は県内でも珍しく、平成11年に館林市指定重要文化財となっています。



長屋門

長屋門は大正期の竣工。モスリン重役だった家高忠三郎邸のもの。



長屋門裏側

長屋門右側にある付属屋は旧足利銀行社宅で、昭和29年竣工。



長屋門内



主屋

中級武士（100石）であった伊王野家の旧宅を平成13年に尾曳町より移築。江戸後期の竣工で館林市指定文化財。

鷹匠町武家屋敷「武鷹館」の斜め向かい（歴史の小径に面し）に城下町としての風情がある土塀がある。。この土塀は「足尾鉾毒事件田中正造記念館」である。本日は休館。（10：52）



足尾鉾毒事件田中正造記念館

当館は2006年10月1日に館林市足次町の旧渡瀬保育園の空き室に開館したが、手狭まのため2013年11月4日に当地に移転した。足尾鉾毒事件や田中正造に関する資料を集めてある。



先に進み県道57・7号館林藤岡線に出て左折し、25m程の右への道に入り、60m程の十字路を右折すると土橋門跡がある。（10：58）

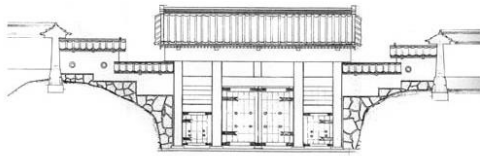




土橋門

土橋門は、昭和58年（1983）、城下町館林のシンボルとして城壁とともに復元された。この門は、城の中心部に通じる三の丸に設けられ、武士の正門である千貫門（せんがんもん）に対し、通用門として使用された。土橋門という名の由来は、門前の内堀に架けられた土橋から来たと言われている。また、防御用に黒色の鉄板が打ち付けられており、地元では「黒門」とも呼んでいる。

門の中には葦土居（しとみどい）が設けられ、外部から中を見えにくくする工夫がなされている。



昭和58年復元の土橋門の立面図
（写真・図面とも、館林市史 特別編第4巻「館林城と中近世の遺構」150・151Pより）

土橋門の立面図



土橋門



土橋門内部と復元井戸



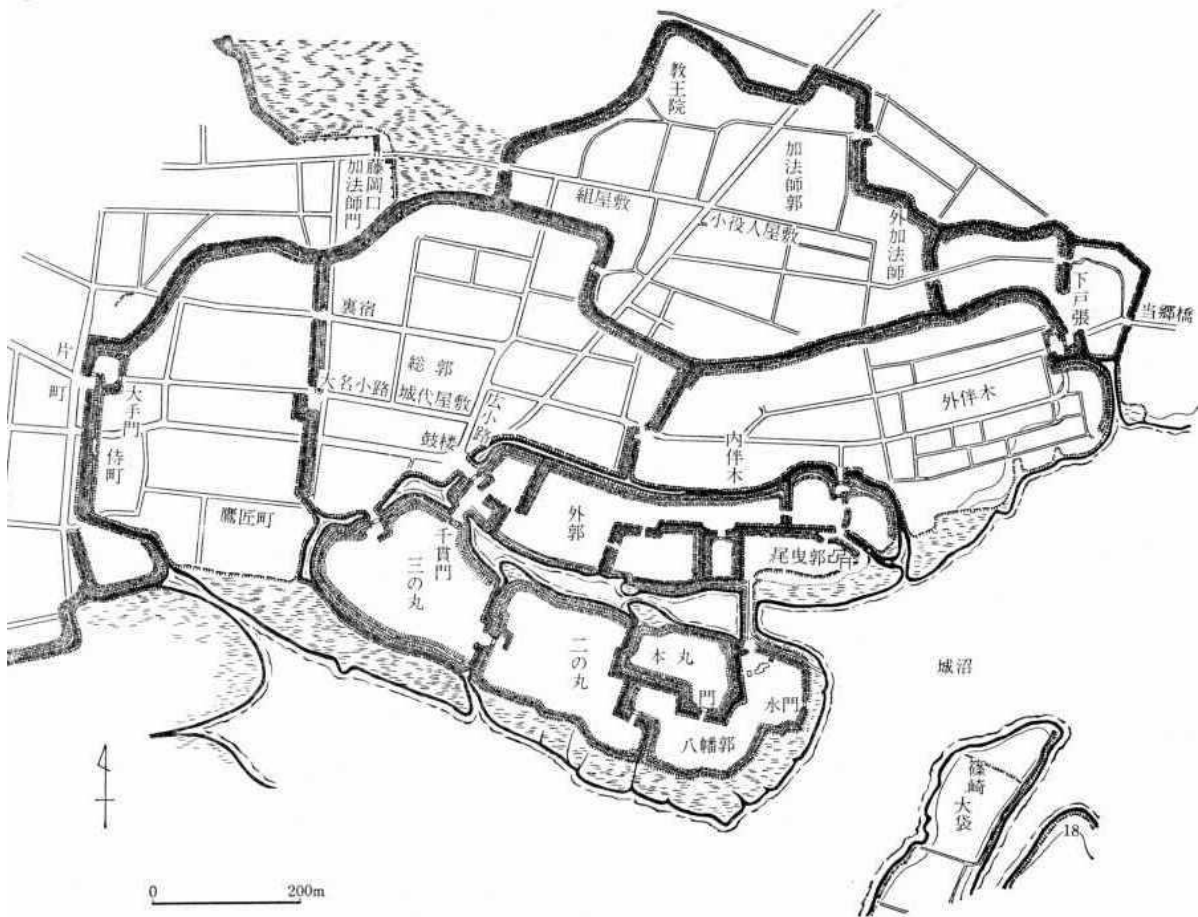
土橋門内部葦土居



土橋門内部



門内側の柵形：近世城郭としては群馬県で唯一現存している柵形



館林市指定史跡 **館林城跡** 《土橋門際の説明板より》

指定 昭和48年4月1日

所在 館林市城町甲23-1他

時代 戦国時代～江戸時代

館林城は、「城沼（じょうぬま）」を自然の要害とした平城で、別名を「尾曳城（おびきじょう）」という。

その形態は、城沼を城の東側の城沼を城の東側の外堀とし、この沼に突出する低台地を区切って、城の中心である本丸、二の丸、三の丸、八幡郭、南郭を置き、これを取り囲むように、稻荷郭、外郭、惣曲輪を構え、さらにその西方の台地に「城下町」を配置し、そのすべてを土塁と堀によって囲んでいた。

築城時期や築城者については、江戸時代になって書かれたもののなかにも、「赤井照光」によって築か

れたとするものがあり、「狐の尾曳伝説」と相まって広く知られているが、実際には、築造時期や築城者を明確にした築城当時の記録は現在まで発見されていない。

現在確認されている「館林城」について書かれた最古の古文書は、文明三年（1471）に上杉軍が「赤井文六、文三」の居城である「立林（館林）城」を攻略したという記録である。

その後、越後の上杉氏や甲斐の武田氏、小田原の北条氏による三つどもえの攻防のなかで、「長尾氏」「北条氏」などが館林城を支配するようになった。

天正十八年（1590）の徳川家康関東入封に併って、徳川四天王の一人榊原康政が十万石で城主となり江戸時代を迎えると、「館林」は、利根川を押さえることができる東北方面への要所として、また、徳川綱吉が五代将軍になってからは、将軍を輩出した徳川宗家に関わる重要な地として、江戸幕府に位置づけられ、最後の城主秋元氏まで江戸幕府の重鎮を務めた七家の居城として栄えた。

城の建物の大半は明治七年（1874）に焼失したが、現在でも本丸、三の丸、稲荷郭、城下町などの土塁の一部が残されており、三の丸には土橋門が復元されている。

土橋門は、城の中心（三の丸）への出入口の一つで、在城当時は、正門の「千貫門」に対し、通用門として使用されたものである。

この土橋門は、昭和五七年に発掘調査の結果をもとに復元したもので、事前の発掘調査により、三基の門の基礎と二基の井戸が発見されている。また、門とあわせて周囲に残る土塁は、三の丸の周りを囲う土塁で、江戸時代からのものである。

特に門からカギの手状に延びる土塁は「薮土居（しとみどい）」と呼ばれ、開門時に郭内を見通すことができないよう工夫されたもので、県内に残る唯一の遺構で貴重なものである。

館林市教育委員会

土橋門を潜って出た左側に館林市文化会館（カルピスホール）がある。この辺りが「三の丸」跡である。文化会館の北側を横切って武士の正門とされた「千貫門」へ行く。



文化会館





三の丸(「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より)

二の丸の西に位置し、南は城沼に面し、北は本丸・二の丸から続く城沼の入江があり、守られている。三の丸への出入り口は土橋門と千貫門、二の丸へ続く二廊門があった。周囲は土塁がめぐらされているのが絵図面でわかる。

「館林市史」によれば、近世後期には、坪数：7848坪(2万5900平米)、土塁の高さ2間。長さ333間余(約600m)。北と西には6尺の瓦塀が建ち、南には柵がめぐらされていた。

内部には城代屋敷、用屋敷、外用屋敷、土蔵、外城代屋敷が建ち、さらに千貫門脇に大番所、土橋門脇に足軽番所、また、井戸が5基記されている。秋元時代には藩主屋敷があった。

文化会館の北側の駐車場を横切って出た道路を左折。30m程の丁字路の右角に「千貫門跡」の石碑がある。(11:03)





千貫門

千貫門は、三の丸の北面中央にあった城内にある重要な門の一つ。その形態は渡櫓門で、土橋門が通用門であるのに対して武士の正門とされていた。





丁字路を右に行くと右側に駐車場と市役所の建物が見える。市役所辺りが「二の丸」の跡である。



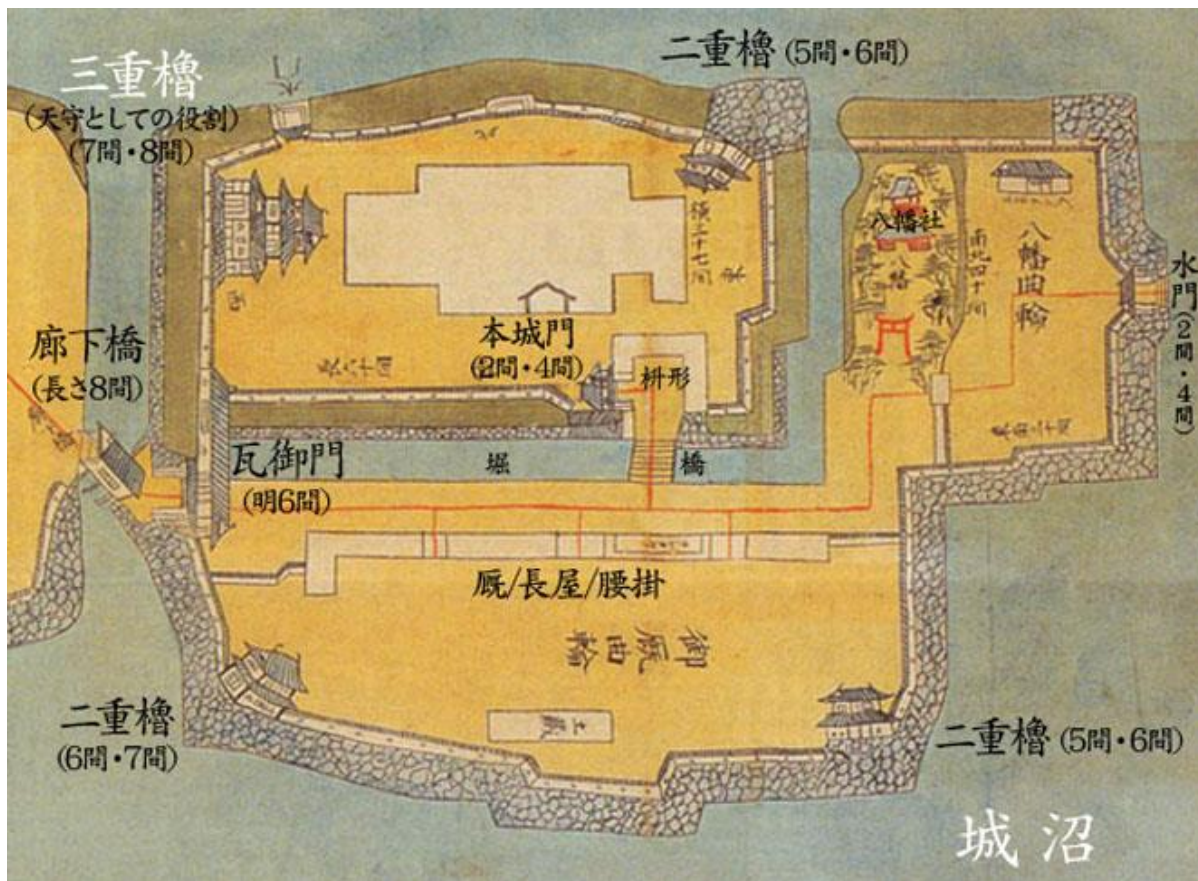
二の丸（「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より）

〔網吉時代〕本丸と南郭（御厩曲輪）の西側にある。三の丸側に二廊門があり、門の南側に張り出し部がある。南西隅に二重櫓（5間×6間）がそびえ、城沼に面する南側は石垣と土塁が巡らされ、土塁には瓦塀が建てられていた。城内の屋敷は「金田遠江守」の記載があり、館林城代を務めた金田正勝（網吉の側近で知行高3000石）の屋敷があった。

〔秋元時代〕本丸と南郭の西に位置し、南、北、西の三方を土塁で囲む。三の丸側に二廊門があり、内側に葺土居が設けられている。（三の丸の土橋門と同じ構造）

坪数は4630坪余（約1万5280平米）、土塁の高さ2間、長さ304間（約547m）でその上に高さ6尺の瓦塀が建つ。秋元時代には藩邸が置かれた。藩邸の間取り図も残っている。

二の丸内の広場を進むと「向井千秋記念こども博物館」があり、この辺りが「館林城本丸」の跡で、手前側は「三重櫓」があった所。二の丸と御厩曲輪（南郭）とは廊下橋で繋がっている。本丸跡の土塁に沿って進む。（11：10～17）

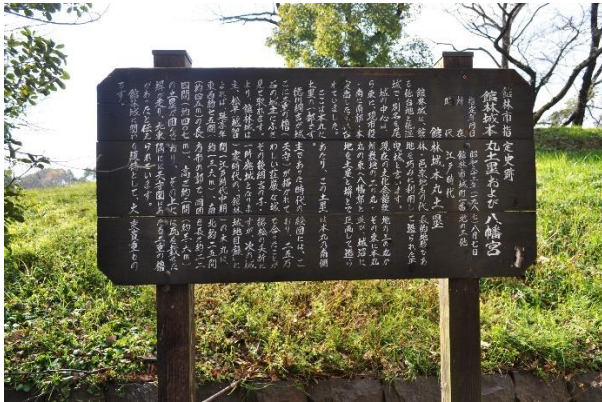


本丸（「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より）

寛文元年（1661）綱吉が館林城主（25万石）となった。寛文4年幕府より城修築のため金2万両がつかわされ、城の大改修をおこなった。城沼に面した部分が石垣になり、櫓も増設、本丸には三重の櫓も完成。

綱吉時代の絵図面によれば〔本丸〕60間×37間の長方形の敷地。北西隅に三重櫓（7間×8間）と水門、北東隅（尾曳神社方向）に二重櫓（5間×6間）、入り口は左折れの榊形、榊形には櫓門（2間×4間）、〔御厩曲輪〕本丸の南に位置し、城沼と接する。八幡郭とは地続き、本丸とは本城門とでつながる。南西隅に二重櫓（6間×7間）、南東隅（つつじ町方面）に二重櫓（5間×6間）。入り口に瓦御門（明6間）と廊下橋（屋根がついた橋）（長さ8間）。蔵（干餅蔵）・厩（うまや）・長屋がある。





[館林市指定史跡]

館林城 本丸土塁

館林城は、館林・邑楽地方の代表的地形である低大地と低湿地を巧みに利用して造られた平城で、別名尾曳城と言います。

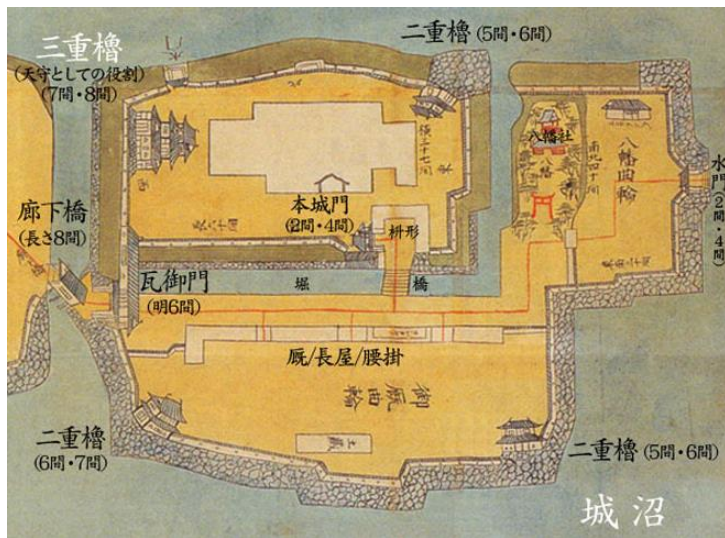
城の中心は、現在の文化会館敷地の三の丸から東に、現市役所敷地の二の丸とその東に本丸・南に南郭・本丸の東へ八幡郭と並び、城沼に突出した舌状台地を土塁と塀とで区画して造られています。

ここは本丸にあたり、この土塁は本丸の南側土塁の一部です。

徳川綱吉が城主であった時代の絵図には、ここに三重櫓（天守）が描かれており、二十五万石の城主にふさわしい荘厳な城であったことが見て取れる。その後綱吉の子・徳松の夭折により、館林城は一時廃城となりますが、継ぎの城主、松平（越智）家時代の「館林城地目録」によれば、延享年間（江戸時代中期）の本丸は、東西約75間（約136m）、南北約25間（約45m）の長方形の郭で、周囲を長さ約224間（約407m）、高さ約2間（約3.6m）の土塁が囲んでおり、その上には瓦を載せた塀が走り、北東隅のは、天守閣にあたる二重の櫓があったと伝えられています。

館林城に関わる遺構として、大変貴重なものです。

石垣の北側が本丸で、南側の広場は「南郭（御厩曲輪）」である。石垣に沿って東へ行くと「八幡宮」があり、その先に「旧秋元別邸」がある。八幡宮は本丸内で、元は「旧秋元別邸」にあった「八幡郭（曲輪）」にあった。



八幡郭・八幡社

館林城では15世紀の赤井氏による築城のときから守護神として尾曳稲荷神社があった。八幡宮は榊原氏が築城したときに守護神として建立したものであろう。

八幡宮 [館林市指定史跡]

「八幡神」は源氏の氏神で、広く武家の間で信仰され、各地に「八幡宮」として勧請されています。この八幡宮は、江戸時代には、武家の守り神として、また、城の守護神として、館林城の「八幡郭」に奉られ、歴代城主の厚い崇拝をうけてきたものです。

明治になって、廃藩とともに、尾曳稲荷神社に合祀されましたが、明治の終わり頃に城跡に進出してきた「上毛モスリン株式会社」によって現在の地に移され、再び八幡宮として奉斎されました。

秋元別邸近く、本丸と八幡郭の間あたりに「墓石群」がある。



館林城出土墓石群

これらの墓石群は、館林城本丸や三の丸土塁から別々に出土した五輪塔や宝篋印塔などの墓石を組み合わせ、昭和48年（1973）に墓域として整備したものです。

特に五輪塔は、その形から中性につくられたものと考えられています。

これらの墓石は、近世の館林城の土塁や石垣を修築するにあたって、石材として集められ利用されたと考えられています。

墓石の中には、中世の館林・邑楽地域の領主であった佐貫氏一族と思われる「沙弥道慶サミドウケイ」の名や、中世の年号が読めたものがあつたと言われていますが、風化が激しいため現在では判読出来ません。

中世の館林市域の石造物について考える上で欠かせない文化財です。館林市教育委員会

菖蒲畑の中にあるあずま屋で休憩。（11：21～29）

休憩後、旧秋元別邸へ向かう。（11：31～35）

本丸の東隣に八幡郭としてかなり広いスペースが与えられていた。明治になり社はそのまま残ったが、明治40年（1907）に尾曳稻荷神社に合祀され、その後八幡郭には上州モスリンの重役の別荘が建てられたため、本丸へ移動。別荘は大正時代に秋元家の所有となり、以後「秋元別荘または秋元別邸」と呼ばれるようになった。

八幡郭跡秋元別邸





【八幡郭（曲輪）】城沼に抜ける水門（2間×4間）が東側にある。蔵があったあたりは秋元別邸と呼ばれる建物がある場所。

【八幡社】赤い鳥居の奥に拝殿、その奥に本殿があり、周囲は土塁と木立に囲まれていた。現在の社（西向き）と違って、南向き。



秋元別邸の庭に「秋元春朝投網の像」がある。



秋元春朝投網の像
 天文元年（一五三二）赤井照光により館林築城がなされ江戸時代には榑原氏・松平氏・徳川氏・太田氏・井上氏から秋元氏へと十家二十三代に及び三百三十余年間親藩譜代の城下町として栄えたところす。
 弘化二年（一八四五）山形より秋元氏が来封し礼朝の時明治維新を迎えました。興朝春朝順朝へと続きますが春朝は元来自然をこよなく愛した、粹人で村人からも親しまれたなかなかの好人物でした。この像は春朝が池に向かつて投網し魚を獲るところで、建立は大正八年（一九一九）です。
 毛利教武作

旧秋元別邸表門（北側）を出た交差点を渡った左に館林市第二資料館として利用されている「旧上毛モスリン事務所」の建物がある。旧上毛モスリン事務所は明治42年（1909）に館林城二の丸跡に建設され、昭和53年に現在地に移設された。



旧秋元別邸

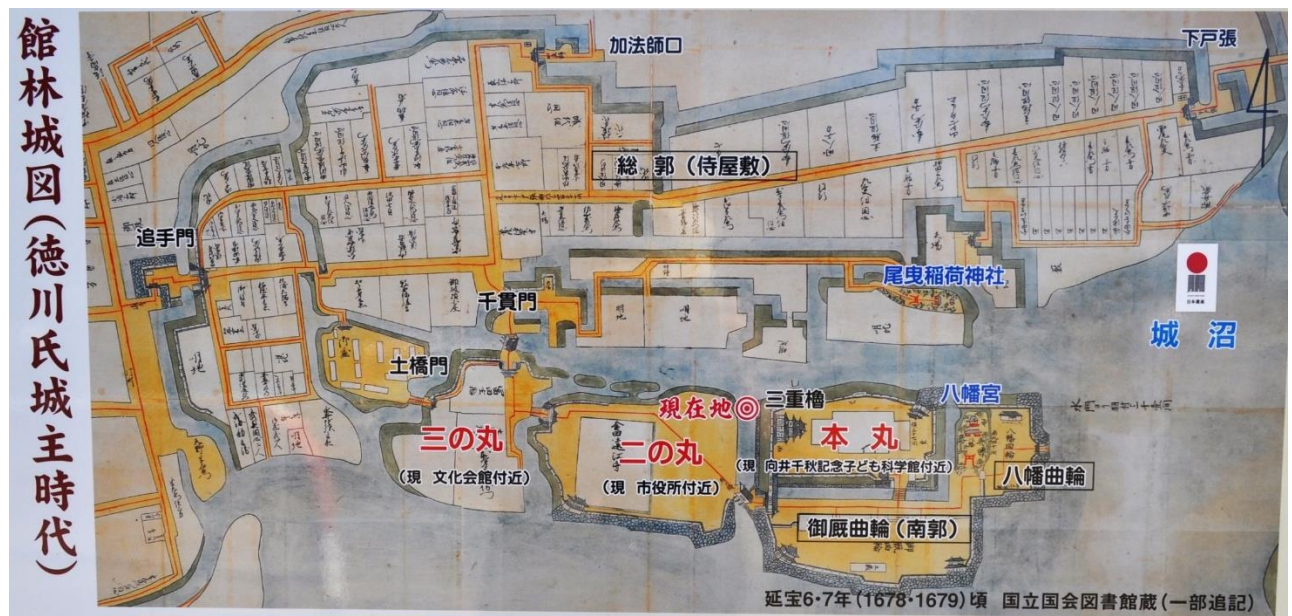


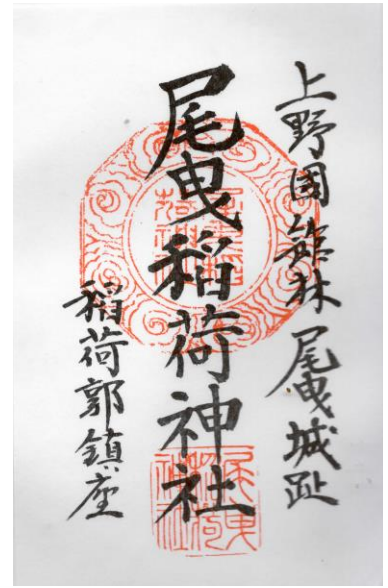
旧秋元別邸表門



館林市第二資料館：旧上毛モスリン事務所

旧秋元別邸表門から信号を渡って90m程進むと右手に「尾曳稲荷神社」の石柱がある。ここが「稻荷郭（尾曳郭）」跡で奥に「尾曳稲荷神社」がある。（11：38～45）







稲荷郭（尾曳郭）・尾曳稲荷神社

尾曳稲荷神社は、城造り伝説で有名。

大袋城（城沼の対岸・花山の東側にあった）城主赤井照光が、こどもたちに捕らえられた狐児を救った。その夜更け狐の化身があらわれて、子狐が助けられた礼を述べ、館林が要害堅固の地と説き移転を奨めて姿を消した。その年の七夕の夜老狐があらわれ、尾を曳いて城郭の縄張り（設計図）を先導して夜が明けた。別れに際し「築城完成の暁は永く城の守護神として仕えよう。私は稲荷の神使新左衛門である」といい終わるや姿を没した。

照光はこれによって築城し、その名も尾曳城と号し、城中に稲荷郭を設け、社殿を造営した。現存する初引稲荷は尾の曳き初め、夜明稲荷（旧裏宿の土塁の側にある、5号道路炭たか炭の近く）は曳き終わりの場と伝えられている。

【尾曳郭】八幡郭の北に位置する。東西に長い敷地は現在も同じ。明地とかいてある場所は、今も空き地。明地の南はすぐ堀（城沼）になっている。

尾曳稲荷神社境内の奉納記念物

「手水（ちょうず）鉢」



寛永元年（1661）徳川綱吉は館林25万石の藩主となり（綱吉は1680年に五代将軍となるまでの約20年間、館林城主だった）、将軍家の権威を示すため城郭の大修築を行った。（寛文4年、幕府から城修築のために2万両支出された）

この手水鉢は、石垣工事に従事した石工頭が寛文5年に奉納したもの。450年前のもの。数少ない綱吉時代の遺品。

刻まれた文字は「御城内石垣中間江戸石屋源左衛門外二名、寛文五天乙巳三月吉祥」と記されている。

尾曳稲荷神社境内の「狛犬」



弘化三年（1846）の銘が刻まれている。弘化2年11月に幕府から移封の命が下された。秋元の家臣たちが、山形から館林へ引っ越してきたのが弘化3年。

城の守り神でもある尾曳稲荷神社に狛犬を寄進したと考えられる。

本殿裏に「花の尾曳弁財天」が祀られている。館林七福神の一つ。



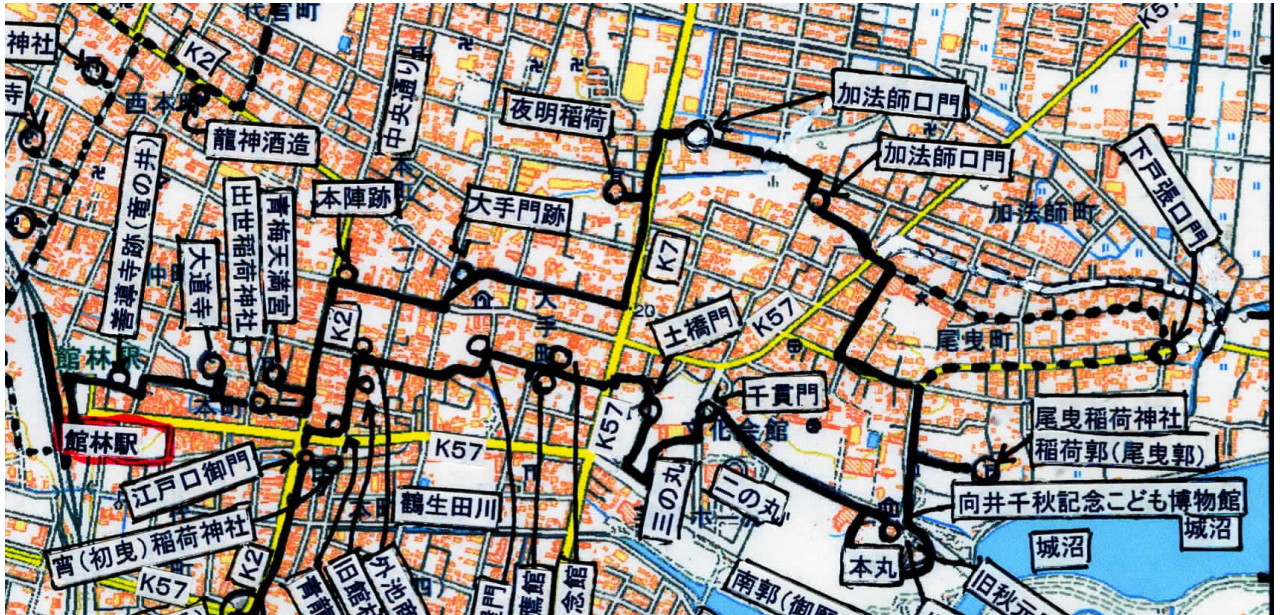
尾曳稲荷神社を出て北行し、出た道路を右折。300m程で左カーブした先70mの十字路に右に「下戸張口門」があった。下戸張口門は館林城の搦手の門である。現在はなにも残っていないので省略した。



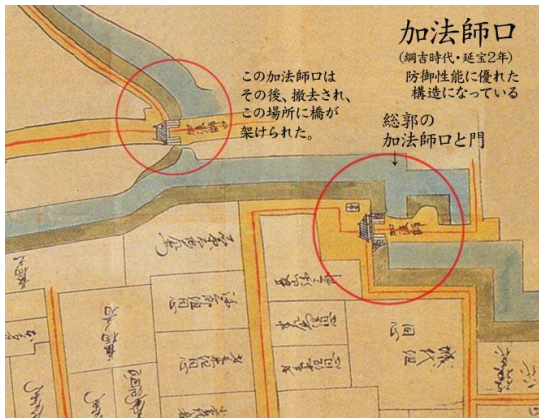
館林御城図（徳川綱吉時代）



秋元時代、安政5年内全図より



尾曳稲荷神社の弁財天から北に進んで出た道路を左折し、300m程の十字路を右折して住宅地を地図を見ながら進み、県道57号線にぶつかるので横切る。20m程に公園がある。公園に沿って曲がり、そのまま進んだ突き当たりに加法師口門（城内口）があったと思われる。（11：53）



公園を右丁字路の左側に館林城総郭土墨跡がある。



丁字路を右折、15m程の丁字路を左折。丁字路を右折して60m程の丁字路を左折して260m程（途中左側に惣郭土墨跡が見える）左側の（県道7号線の手前40m、（有）兵藤溶接所の前）に小さな「加法師口御門跡」の石柱があり、ここにもう一つの加法師口門（城下口）がある。（12：04）



加法師口門〈城下口〉(かぼうしぐちもん)

加法師から館林城内への出入り口。綱吉時代の絵図面を見ると、城内を守る門と城下を守る門の二重構造になっており、東北からの仮想敵国（伊達家）への守りを固める重要な門であることがわかる。

城下口加法師口門（城下口）の40m先の県道7号線の朝日町交差点を左折。120m程先（ドミノピザの先）で右の道に入った奥に「夜明稲荷神社」がある。（12：08～11）



夜明稲荷神社

初引稲荷は尾の曳き初め、夜明稲荷は曳き終わりの場と伝えられている。





頭巾とマスクをした狐

夜明稲荷神社由来（境内の説明板より）

祭神 倉稲魂命

当社は天文元年（1532）館林築城のさい城主赤井照光によって創建されたと伝えられ、城の守護神として、また当地の産土神として尊崇されている。築城四年前の享禄元年（1528）正月当地大袋というところに住んでいた照光は、近藤林で子ギツネの危難を救った。

するとその親ギツネは報恩のため、天下にまたとない城地を案内することを約束、その年の七夕の宵約束に違わず親ギツネは姿をあらわし尾を引きながら縄張りを先導、たまたまこの地に来たとき引終わると「私の主人の稲荷神は、ながく城下に」とどまり守護し給うお考えである。築城のうへは社殿をつくり給い」と、告げると姿を消した。

そのときすでに夜明けであった。その後、入城した榊原康政は社殿を再建、以後歴代城主は入封のつど参拝し、また年々蔵前五俵を奉納し神社の維持につとめた。



夜明稻荷神社から県道を300m程（信号3つ目の先）にラーメン屋自慢亭があり、ここで昼食とする。（12：12～13：03）混んでいて入店までかなりの時間おもてで列んだが、美味しく、これなら行列ができると納得。



店を出て、県道を100m程戻り、二つ目の信号交差点を左折。この通りが「大名小路」と呼ばれる大手門（追手門）から本丸に向かう通りである。



300m程で公園（三角公園）があり、公園の手前角に「大手門跡」石碑がある。（13：10）



大手門

大手門は、現在の三角公園（大手町）の東北隅にあつて、東側の侍屋敷、西側の城下町を隔てていた。ここから東へ約400mにわたり通称「大名小路」と呼ばれる大路が伸び、広小路、千貫門へと続いた。

現在では、土塁や濠などは姿を消し、大手門跡碑が残されているのみである。

三角公園から西北に延びる道は太田口御門を通り県道2号線を進んで太田・伊勢崎・前橋方面に向かう。



大手（追手）門跡石碑

大手は追手とも書き、城の背面を指す搦手（からめて）に対し、城郭の正面を意味する。攻防に際し拠点となるため、最も嚴重な施設でもあった。

館林城大手門は、城の正面として石垣に囲まれた渡櫓門の形態をし、さらに、防禦面・攻撃面の両機能を持つ櫓形の土塁および一の門を備えていた。櫓形内部は、城外に向かい下り坂となる例が多く、攻防がより合理的に図られていたことがわかる。

この大手門から東へと通称大名小路と呼ばれる大路が続き、城内に通じていた。

現在の三角公園は館林城大手櫓形跡付近にあたるが、時代の要請とともに門をはじめ土塁・濠などが次々と姿を消し、今にとどめるものはない。

（後略） 昭和五十九年三月三十一日 館林市教育委員会



三角公園を左に進み、公園の南角の信号交差点を右折。この交差点の南西角に「片町」の解説版がある。



『片町 この通りを境に、東側が城郭、西側が町屋であり、片側町であったことから片町と呼ばれた。』

200m程で中央通りの本町二丁目交差点に着き、この交差点の東北角辺りに館林宿本陣があった。
(13:16)



本町二丁目交差点を左折し、中央通りを200m強進んだスズキストアの先の右側の路地を入った奥に「青梅神社」がある。(13:21~28)

路地の入口に「谷越町」の解説がある。



『谷越町（やごえまち） 城下町建設に伴い谷越（やごえ）村の人が移り住んだので、谷越町と呼んだ。谷越は、谷（ヤ）（湿）地（チ）を越えて行き来するの意から起こったものと考えられる』



青梅神社（あおうめじんじや）別称 青梅天満宮

祭神 菅原道真公 素戔鳴尊 猿田彦神

由緒 当社縁起によると、祭神菅原道真公が左大臣藤原時平一派によって大宰府に左遷されたとき楊枝の先に梅の実をさし、それぞれ一個ずつを東西南北に投げた。最初に投げたのが出雲国にとび花久理梅となり、つぎは南方讃岐国へとび花さく梅となり、西は筑前大宰府の飛梅、東は上野館林へとび青梅天神となったという。日本四社の内東方の一社である。

鎮座年記は赤井山城守城主（1471～1562頃）とされ、「館林代々城主聞書」には「谷越町（現在地）天神の宮は追手（大手）のそとの南方に有之候処文禄四乙未年今の所へ移す」とあり、西暦1595年（文禄4年）以前は三角公園の南西付近にあったものを榊原康政城主時代に、城拡張工事のため移転したものと伝えられる。（以下略）

拝殿（1631年築1862年改修）

青梅神社の拝殿格天井は、幕末の大改修で浮世絵師北尾重光により完成を見た。太い木を井桁（いげ）た城に組み、上に板を張った天井で格縁（ごうぶち）の間には、色彩豊かな動植物77枚が書き出されている。

絵馬殿（1631年築1794年再建）

本殿：間口3尺2寸（122cm）、奥行5尺6寸（213cm）、春日造柿葺、寛永18年（1641）再建。

幣殿：間口1間3尺（342cm）、奥行2間（456cm）、入母屋造瓦葺。

拝殿：間口3間4尺3寸（847cm）、奥行2間3尺（570cm）、入母屋造瓦葺、寛永8年（1631）築、文久2年（1862）改修。

額殿：間口3間3尺（798cm）、奥行2間3尺（570cm）、入母屋造瓦葺、
寛永8年（1631）築、寛政6年（1794）再建。

天満宮標柱：参道入口にあり、二段の台石を持ち総高は2.3m程度。表面に「日本四社青梅天満宮」
右側に「寛政六年（1794）甲寅歳九月二十有五日後岡美啓敬白」とある。

裏面には

所謂四社者

西 筑前国飛梅社

南 讃岐国四季梅社

北 出雲国花久里梅社

東 当青梅社は也 とある。



青梅神社の裏の路地を南下し、次の十字路の左角に小さな社「出世稲荷神社」がある。（13：29）
出世稲荷神社の由来は不明。



出世稲荷神社から路地を戻ると、左側に「大道寺」の参道がある。(13:31~35)



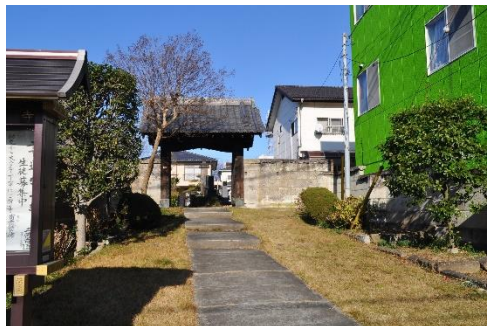
大道寺（館林城の再建をめざす会 城下町館林／お寺紹介）

寺伝によれば、北条氏の家臣・大道寺式部小輔を中興とし、その名から大道寺としたという。綱吉時代（延宝年間）に描かれた城絵図によれば、善導寺敷地内に大道寺の前身で見松院という別院が描かれている。見松院は善導寺の役寺としてその寺務諸役をつとめた。明治年間善導寺から離れ独立した。

国学者で天保8年（1837）越後柏崎で乱を起こした生田万（よろず—1801~37）父祖の墓（市史跡）や、田山花袋算術の師・戸泉綱作の墓がある。



本堂雨樋に大給（おぎゅう）松平家「一ツ葉葵」紋が付けられている。



山門を潜って大道寺を出て右折（西へ）して進むと、駐車場に突き当たるので左折。25m程で丁字路を右折した先に「竜の井」がある。（13：40）この一帯（館林駅も含めて）は昭和65年都市計画で城沼東端へ移転するまでは善導寺の境内であった。



善導寺跡「竜の井」

善導寺は号を終南山（しゅうなんざん）見松院（けんしょういん）善導寺（ぜんどうじ）といい、宗派は、浄土宗。本尊は阿弥陀如来。

【由緒】（善導寺HPより）寺伝によれば、元明天皇和同元年（708）、行基菩薩東国遊化の砌、上州館林に錫を止め、旧土橋村と加法師村の間の林中に一庵を結ばれたのが始まりといわれています。

後鳥羽天皇建久四年（1193）3月、頓阿見性法師、行基菩薩の旧跡を偲び、草庵を修建し、菩薩の化益された羅刹魁の祠を営み、終南山の鍾馗に擬（なぞら）えて鎮守とし、浄業専修のうちに弘長元年（1261）3月15日百余歳をもって示寂されました。

その後十数年を経た九十一代後宇多天皇建治二年（1276）10月、浄土宗4祖寂恵良暁上人により同地に専修道場を再興のため伽藍が建立され、初め「終南山 見性院 善導寺」と呼称されました。それまでは、単に「行基寺」と唱え、或いは「見性院」と称えられてきたといえます。

以来三百余年間にわたり、歴代住職よく法灯を継承すると共に、代々の領主（由良氏、長尾氏、赤井氏、北条氏）により令法久住の檀林として特に庇護を受け、寺門に制札を掲げ、軍兵の狼藉を禁じられ、護持されました。

元龜天正の頃戦国争乱の為、寺院は荒れるに任されるに至りましたが、天正十八年（1590）榊原康政侯は、徳川家康公より館林城主10万石に封ぜられると、以前から徳行四方に聞こえ、白旗流祖建幢の再興を志されていた幡随意白道人に篤く帰依し、上人を当寺中興第一世と定め、場所を現在の谷越の地（館林駅周辺地）に移し、本堂をはじめ七堂伽藍、附属堂宇を完備されました。

康政侯は、このとき善導寺を榊原家の香花寺とし、荘園100石が与えられました。慶長十一年（1606）康政侯遷化され、当家の菩提所となりました。

元和元年（1615）家康公、「松」に十八公の嘉誉あるに因み（一説には彌陀の四十八願中の王本願に擬えて云々）、関東に十八の檀林選定にあたり、当寺もその一つに加えられ、院号が「見性院」から「見松院」に改められました。

正保元年（1644）、榊原三代忠次侯、奥州白川へ転封の折り、三代将軍家光公より供田100石と諸役免除の朱印を賜り、以来徳川代々の将軍並びに館林各代領主の当寺を遇すること篤く、明治二年（1869）二月二十三日勅願所の綸旨を下賜されました。

昭和六十年、館林市都市計画により、旧谷越の地より、城沼東端旧沼付の地に移転再興されることとなり、約五年余にわたって現在地楠町に再建されました。

【竜の井】

竜の井は元々善導寺（館林藩主榊原家の菩提寺）の境内にありましたが、善導寺は館林駅前の再開発で楠町に移転したことで竜の井だけこの地に残りました。

この竜の井には次のような伝説が残っています。

天正18年(1590)、館林城を攻め倦んだ石田三成と大谷吉継は起死回生の策として城沼に木橋を設けて一気に城内に突入する作戦を立てました。しかし、橋が完成した翌日、総攻撃の前に突如として橋が消滅し、館林城の守護神である狐か、あるいは城沼の主である龍神の仕業と噂が立ち結果的に和議による開城となりました。北条家が滅びると徳川家康の家臣で徳川四天王とまで言われた榊原康政が10万石で入封、改めて館林城の拡張と城下町の整備が行われ、当地に善導寺が移される事になりました。

中興に先立ち康政が篤く帰依した幡随意白道上人を招くと上人は城下の民達を集め度々説法を行い浮世の習いを説いて聞かせていました。すると、毎回説法の毎に現れ熱心に聴く年の頃17、8歳の若く美しい女性がいたので不思議に思い、上人はその生い立ちを尋ねると城沼に棲む龍神の妻で説法によって本当に救われたと話し出しました。辺りに誰も居なくなると上人は一度本当の姿を見せてほしいと懇願すると女性は恥ずかしながら20尋(約36.6m)の龍の姿に戻りました。龍は人間に本当の姿を見られたからはもう二度と人の姿に戻る事はできません。これからは善導寺の守護神として上人を守っていくと告げ井戸の中に消えていったそうです。

善導寺は歴代館林藩藩主や幕府から庇護され寺運も隆盛し、龍が消えた井戸は「竜の井」として大切にされたと伝えられています。

この井戸は城沼と青龍の井戸が繋がっているという伝説も伝わっています。

西へ進むとすぐに館林駅東口のロータリーに出る。



館林駅

明治32年(1899)に北千住駅から久喜駅間を開業した東武鉄道は北へ延伸し、明治40年(1907)に足利町駅(現・足利市駅)まで開業した。館林駅も同日(明治40年8月27日)開業。現在は、伊勢崎線、佐野線、小泉線の3路線が乗り入れている。

現在の館林駅は昭和12年(1937)に改築されたもの。コンクリート造2階建て、寄棟、棧瓦葺の建物で正面にはセグメンタルペディメントと称する半円形に膨らませた楕型破風を設(しつら)え意匠を施し下部には上部が半円形の開口部にするなど正面性を強調している。

又、曲線や縦長の開口部の間口部を採用するなど洋風建築の要素を取り入れ、建築当時の駅舎建築のとくちょうが見られる。館林駅は平成10年(1988)に「しやれた模様の窓がある洋館風の駅舎で小規模ながら歴史を感じさせる駅」として「関東駅百選」に選定された。

13時45分、館林駅に到着。13時57分発久喜行きに乗る。

今日は館林城をめぐるウオークであった。

以上